



286号

2023/9

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



村外れに在る廟で、普段着姿でお祈りするギャロンの婦人：この廟はギャロンで古くから多数派を占めるボン教のものですが、チベット仏教の村人も一緒にお祈りします。お祈りの作法はボン教もチベット仏教もほぼ同じですが、廟を回りながらお祈りする時はボン教が反時計回りでチベット仏教が時計回りです。

(四川省丹巴県にて 2002 年 11 月撮影：姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三)

'わんりい' 2023 年 9 月号の目次は 18 ページにあります

今月の言葉は、日本語の四字成語辞典には勿論、私が所有する他の児童向け四字成語絵本にも載っていませんでした。中国語の辞書には、「一度目を通せばすぐ暗誦できる」「記憶力が優れていることの喩え」と出ていました。因みに、中国では「過目不忘」の方が一般的だと、挿絵を描いてくださる満柏画伯からご指摘がありました。

・>・>・>・>・>・>

三国時代、魏の曹操は兵法書「孟徳新書」を著しました。

ある時、蜀の大臣張松が魏の国を使者として訪れると、曹操は、自慢したくなり、書き上げた「孟徳新書」を張松に見せました。張松はその書を一読して、この兵法書が魏の將軍たちに知れ渡ると蜀の国にとって不利になると思い、わざと「くだらない本だ」と言う様子をして「この本の中に書いてあることはみんな、私が三歳の頃から既に見聞きしていることで、蜀では誰でも暗誦できるようなことですよ」と言い放ち、本当にすらすらと暗誦して見せたのです。

それを聞いて曹操は、張松の話信じ、この本は恥をさらすようなものだと思い、直ちに焼き捨てさせてしまいました。

本当のところは、張松がこの本を一目見て直ぐに暗記してしまったのであって、彼が言ったことは真実ではありませんでした。

・>・>・>・>・>・>

言葉の意味:一度見ると直ぐ覚えてしまう、記憶力抜群の様子を表す。

言葉の使い方:この人は「過目成誦」で、記憶力は素晴らしく、本でも新聞でも、一度読むとほとんど覚えてしまう。

・>・>・>・>・>・>

この話は「三国志演義」に載っている話です。蜀の劉璋の使者として魏に出かけた張松は、魏の大臣に、曹操と面会するために賄賂を要求されました。怒った張松は、思いっきり曹操の悪口を言い、馬鹿にしたので、魏の大臣が反論を試み、曹操の

聡明さを示すために、曹操の著書「孟徳新書」を張松に見せたのです。

その本を一読した張松は、「この本の内容は、蜀では3歳の子供でも知っている。昔、同じような本があったが、著者が無名だったので広く知られることはなかった。曹操はその本を利用して、新たに自分の本としたのではないのか」と言って、「孟徳新書」の価値を否定しました。

魏の大臣は怒って張松に、蜀では子供でも知っているというその本を暗誦させると、「孟徳新書」に書いてあることをそのまま暗誦したのです。

大臣は驚いて曹操に報告しました。曹操は話を聞いて、蜀に同じような本があるのでは、こんな本を書いたと馬鹿にされると考え、腹立ちまぎれにその本を直ちに焼き捨てさせてしまった、と言うお話です。「三国志演義」は「虚7実3」と言われる、歴史を題材にした物語の本ですが、「孟徳新書」の实在は確認されていません。しかし研究者によると、曹操が不在の時に、曹操の軍隊が戦えるようにするための、メモ形式の指令書があったことは充分想像できることで、そのメモがこんな形で登場したのではないかと考えられるそうです。何と言っても戦術の天才曹操のことですから。

「三国志演義」に端を発する四字成語もかなり多いのだそうですから、暇な時に、探してみるのも一興かもしれませんね。



挿絵：満柏画伯

白居易の『微之を夢む』

報告:吉光 清

今回、取り上げられたのは、白居易(772~846)の『微之を夢む』という七言律詩でした。

白居易は、これまでも複数回、取り上げられて来ており、漢詩を少しでも齧った人ならば、ご存知の大詩人です。

植田先生が、今回のために配布された資料によると、白居易は中唐の詩人、太原の人。字は楽天。晩年、仏教への帰依を深め、洛陽の郊外にある香山寺の僧らと親交を結んだことに因んで香山居士と号しました。現存する詩は唐代詩人中、最多の三千余首で、『長恨歌』や『琵琶行』が特に有名です。『白氏文集』は71巻あり、平安時代以降、わが国で広く愛誦され、日本文学に大きな影響を与えて来ました。今回の詩の背景を知るために、官吏としての経歴を見ると、28歳の時(800年)進士に及第しました。

「翰林学士」、「左拾遺」などを歴任し、順調な出世コースを辿っていましたが、43歳の時(815年)、罪を被せられ江州(現、江西省の九江)の司馬に左遷されました。これは都での暗殺事件について出した意見書が越権行為として問題とされたためです。背景には宦官との確執がありました。以後地方や中央の官を経て、71歳の時に退官しました。

この詩の題名に出て来る「微之」とは元稹(779~831)の字です。白居易と同様、元稹も唐代の詩人で洛陽の人。貞元9年(793)に15歳で明経科(科挙の一科で、論語などの経書に精通しているかを試験した)に及第し、貞元19年(803)に「書判拔萃科」に及第し、元和元年(806)に「左拾遺」となった後に左遷されました。その後も左遷と昇進を繰り返し、長慶2年(822)に宰相となるも半年足らずで罷免され、地方に転出し、赴任地で没しました。

二人の親交について、ある書物には「白居易が32歳、元稹25歳で『書判拔萃科』に及第した8人の中に二人がおり、共に『校書郎』を授けられ、終生の友情を交わすことになった」のように書かれています。

両者は7歳の年齢差ながら、同時に「校書郎」を授

けられて以来の親交があり、共に平易な表現を心掛け、詩風は「元和体」と呼ばれました。「元稹は軽々しく、白居易は俗っぽい」の意味で「元軽白俗」と揶揄されたようです。

植田先生による、この詩の訳は、

白居易の『微之を夢む』

白居易

やらいて たずさ ゆめ どうゆう
夜来手を携えて夢に同遊す

あした お きん み
晨に起きれば巾を盈たして

なみだおさむ な
涙取る莫し

しょうほ
漳浦老身三度の病

かんようしゆくそう
咸陽宿草八回の秋

うず でいほね しょう
君は泉下に埋もれて泥骨を銷し

じんかん ゆきこうべ
我は人間に寄りて雪頭に満つ

あえいかんろう
阿衛韓郎相次いで去る

やだいぼうまい いな
夜台茫昧として知るを得たるや不や

〈大意〉

夜半、微之と一緒に遊んでいる夢を見た。朝、目が覚めて「ああ、元稹はもうこの世にいないんだ」と思ったら、涙が後から後から出て来て止まらず、ハンカチをぐっしょり濡らしてしまった。

一別以来、私は漳浦(地名)で暮らして三度の病を得た。君が埋葬されている咸陽(地名)の墓場の草は、もう8回生え替わっている。君の骨はお墓の下で土に溶かされただろう。

一方、私は頭髪が真っ白になりながら、この世に為すことも無く生きている。阿衛と韓郎も相次いで亡くなった。二人は君のところに行ったはずだ。しかし、そちらは真っ暗闇だから、果たして見分けがつかないだろうか？

〈先生の解説〉

『泉下』とは、『あの世』、『黄泉の国』のことですね。8年で溶けてしまうというのは科学的に正しいかどうか分かりませんが、骨が溶けてというのはリアルな表現ですね。(ただこの3句目と4句目、更に5句目と6句目はそれぞれ対句になっている点に注意)。夢の中で会った時は、二人で感激して涙の対面をしました。目が覚めて、時の経過を思い浮かべるうち、阿衛と韓郎のことをフッと思い出したんでしょうね。『阿衛韓郎』には、いろいろな説がありますが、『阿衛』は娘で、『韓郎』はその婿であると言われています。『夢で逢った時は訊きそびれたけど、君の可愛い娘もその婿も相次いで亡くなってそちらへ行ったはずだが、暗がりの中で見分けがつかなかったのかな?』。最後は疑問の形になっていますね。

「現代風に考えると、少し変だとも思いますが、漢詩の世界では男同士の友情は男女間の愛情以上に重要なテーマの一つになっています。それにしても、この二人の友情表現はユニークですね」と植田先生。

その後で、「皆さんは、悲壮感で張り詰めた流れを最後で茶化すような、この心境は理解できますか?」と質問されました。

そして、「この詩をリクエストされたのはどなたでしたか?」とお尋ねになりました。

参加者のお一人から声上がり、「私です。本田です」と名乗られた後、「この詩の載った本がなかなか見つからず、1年あまり後ようやく見つけました。最終句の意味が気になっていました。手元の本では『(多分) 分からなかったらうな』のように書いてありましたが」と話されました。先生曰く、「白居易は人情に厚い詩人として、日本で持て囃されて来たんですが、この詩の存在は知りませんでした。しかし、リクエストを頂いて、中国のネットで検索したら、沢山ヒットしました。

『不』が文末に来て疑問を表すことがあるので、『見分けが果たしたのだろうか?』ということになります。漢詩の押韻法に拘る人はオヤツと思うかもしれませんが、「白居易の詩として、とても面白い1首です。良い詩をリクエストしていただきました。この詩の存在はあまり

意識していませんでしたが、白居易の面白さを再認識しました」と植田先生。

全員で音読後、文法・作詩法について解説されました。

mèng wēi zhī bái jū yì
梦 微 之 白 居 易

yè	lái	xié	shǒu	mèng	tóng	yóu
夜	来	携	手	梦	同	游
chén	qǐ	yíng	jīn	lèi	mò	shōu
晨	起	盈	巾	泪	莫	收
zhāng	pǔ	lǎo	shēn	sān	dù	bìng
漳	浦	老	身	三	度	病
xián	yáng	sù	cǎo	bā	huí	qiū
咸	阳	宿	草	八	回	秋
jūn	mái	quán	xià	ní	xiāo	gǔ
君	埋	泉	下	泥	销	骨
wǒ	jì	rén	jiān	xuě	mǎn	tóu
我	寄	人	间	雪	满	头
ā	wèi	hán	láng	xiāng	cì	qù
阿	卫	韩	郎	相	次	去
yè	tái	máng	mèi	dé	zhī	bù
夜	台	茫	昧	得	知	不

「この詩は1句目(游)、2句目(收)、4句目(秋)、6句目(头)、8句目(不)がそれぞれ平声尤韻で押韻されています。これだと、もし8句目の韻字を『不 bù』と読むと平仄が合わなくなってしまうのですが、ユーチューブなどで聞くと『fou』のように聞こえます。『不』を文末に置いて疑問などを表す用法があり、その場合は『fou(平声)』と発音させるのです。意味としては『否』と同じですが『否』と表記してしまうと『否fǒu(仄声)』になり、平仄が合わなくなってしまう。『不』を『不(fǒuまたはfou)』と発音させれば、8句目も『平声・尤韻』となり、平仄の条件を満たした七言律詩になるのです。これは作詩法のテクニックの一つでしょう。

「また、平仄を合わせるための、別のテクニックとして倒置法が利用されることもあります。ここでは省略します。王維(701~761)や李白(701~762)の時代では平仄を破ることも珍しくありません。これらは拗体おうたいとして許容されていますが、中唐以後の作詩では厳しくなりました。それは科挙に詩作の課題が入っ



元稹の肖像 (ウイキペディアより)

てきたからですね」と植田先生。

〔参考〕として紹介された元稹の詩

こちらは、白居易が左遷されたことを聞いて、元稹が作った詩です。

wén bái lè tiān zuǒ jiàng jiāng zhōu sī mǎ
聞 白 乐 天 左 降 江 州 司 马

yuán zhēn
元 稹

cán dēng wú yàn yǐng chuāng chuāng
残 灯 无 焰 影 幢 幢

cǐ xī wén jūn zhé jiǔ jiāng
此 夕 闻 君 谪 九 江

chuí sǐ bìng zhōng jīng zuò qǐ
垂 死 病 中 惊 坐 起

àn fēng chuī yǔ rù hán chuāng
暗 风 吹 雨 入 寒 窗

白楽天の江州司馬に左降せらるを聞く

ほのお どうどう
残 灯 焰 無 影 幢 幢 たり

ゆうべ きゅうこう たく
此の夕君が九江に谪せらるを聞く

すいし びょうちゅう
垂死の病中驚いて坐起すれば

あんぷう かんそう
暗風雨を吹いて寒窓に入る

〈大意〉

火影がゆらゆら揺れて今にも消えそうである。この日の夕方、貴方が九江に左遷されたという知らせが耳に入って来た。私は死ぬほどの病に罹っていたが、驚いて起き上がった。暗い風が私の貧しい家の窓に吹き込んでくる。

〈先生の解説〉

元稹が白居易の左遷のことを聞いて悲しんでいるんですね。漢詩のお手本みたいな詩で、白居易の詩に比べれば「オヤッ」と思わせる表現は有りません。真似したら作れそうな詩で、独創的なところはさほどありませんね。

この時、元稹はどこに居たかということ、実は四川省の通州（今の達州）に左遷されていたのです。同じ身の上で、白居易の気持ちが良く分かったということでしょう。

左遷された者同士だけにしかわからない悲哀でしょうか。日本でも、言うことを聞かない部下はどんどん左遷して、言うことを聞く者だけを傍に置いた話が

ありましたね。千数百年前の話と、今の日本も大して変わらないかも知れませんね。

そんなことを考えながらこの詩を読むと何だか身につまされるものがあります。

それからもう一つ、なぜ、この元稹の詩を「参考」として紹介したかということ、この一首が『唐詩選』に入っているからなんです。『唐詩選』には白居易、杜牧（803～852）も入っていない、韓愈（768～824）も一首しか入っていません。要するに、盛唐の詩人が重んじられ、中唐の詩人、白居易や韓愈は嫌われたんですね。明代に編纂された『唐詩選』の持つ偏見性がよく表れていますね。白居易が左遷されたことを悲しんで作った元稹の詩が採用されて、肝心の白居易の方は一首も採録されていない。この辺が面白いですね。

この点については、また別の機会に取り上げてみましょう。

〈参加者からの感想や質問〉

閉会予定の時刻を少しオーバーしていましたが、参加者から、若干の質問や感想が出されました。「中国の物語には『邯鄲の夢』や『胡蝶の夢』の例が示すように、『人生とはこんなものか』と達観したり、『夢』に寓意的な意味を持たせたりしますが、ここでは夢で『遊んだ』後、ハンカチを濡らしたのは、夢そのものの中に“真実感”、リアリティを感じていたということではないでしょうか」。

先生曰く「夢の中の“リアリティ”というのは、素晴らしい表現で、良いですね」。

「退官して、4000坪の土地に鶴を飼い、悠々自適の生活を送っていた白居易が、些事に囚われなくなり“余裕”を持って詩作できたということではないでしょうか？」に、先生曰く「そうですね。飄々としている感じとも言えますね」。

ここで閉会となりました。

■事務局から

今回の詩をリクエストしてくださった本田幸枝さんは、最近、本講座に参加された方です。先生とのやり取りでは、この詩に関して、いろいろご苦労されたようです。どのような経緯でこの漢詩を見つけ、興味を持たれたのか等についても、面白いお話がありそうです。そこで、それらのお話を「わんりい」に書いていただくようお願いしました。ご期待ください。

『わんりい』休刊月の8月、2日から7日まで観光ビザを取得して中国は大連を旅行した。今回はそのことをこの「雑感」の場を借りて報告させていただきたく、ややこじつけ風の標題となった。本格的な新型コロナ蔓延直前の2020年1月上旬以来、約3年半ぶりの中国(場所も同じく大連)を大いに期待する一方、不安もあった。『わんりい』2023年5月号では大川健三さんが「成都市の今(2)」の中で「当地では身分証明カードとスマートフォンの出番が急激に増えていて、特にスマートフォンは出歩く時に必須になっています。」と報告されている。日本でもそうであるが、この間の大きな変化はスマホの利用を含むオンライン化の急速な進展であり、中国では具体的にどのようになっているのか、ふらっと短期旅行で対応できるのか、心配であった。

実は、出発前から大失敗をしそうになった。中国入国に際して新型コロナ PCR 検査の陰性証明を提出する必要がなくなったことは了解していたが、現在でも48時間以内に「中華人民共和国出/入境健康申明卡」をオンラインで登録する必要があることはまったく知らなかった。出発前日の深夜、日本在住の中国人の友人が、念のため、と電話で教えてくれて初めて知った。それから大慌てで、知人にも助けてもらい何とか間に合った。記入項目自体やや複雑なうえ、中国現地在住の誰かを連絡先として指定しなくてはならない。登録がうまくいくとQRコードが有効期限とともに現れ、それをスクリーンショットで自分のスマホに保存する。

翌日の成田空港出発ロビーでもこの健康申請カードの必要性は喚起されていた。そこで初めて知ったとしたら、どんなことになっていたか、今思ってもゾットする。さすがに、万一、登録せずに中国に到着しても、入国できずに送り返されるということはないようであるが。実際、大連周水子空港に到着すると税関の入国手続きの前に、まず、係員にスマホのQRコード画面を見せて確認を取り、さらに、そのQRコードを専用の機械に読み取らせて通過するという流れになっていた。その場で落ち着いて登録手続きが出来る雰囲気ではなかった。なお、中国からの出国に

際しても、同様のオンライン登録は必要である。

さて、現地での行動に際してスマホが活躍するのは買い物、タクシー乗車などにおけるQRコード決済である。コロナ前から中国ではQRコード決済が日本以上に進んでいることは知っていたが、短期の滞在なら現金決済でも何とかなる、と気軽に考えていた。しかし、いつまでも、そう言うてはいられないようだ。

利用の前提は街中でも(つまり、Wi-Fiが無い状態でも)スマホの通信機能が使えることである。そこで、まず事前に日本でSIMカード(キャリアは「中国聯通」)を買い、スマホに入れ替えることにした。ネット情報によると中国現地に着いてからSIMカードを買って利用するのは、以前に比べて難しくなっているらしい。

QRコード決済のアプリは日本で「支付宝」(アリペイ)をインストールした。ちょうど、ごく最近の7月21日、「微信支付」(ウイチャットペイ)に続いて「支付宝」も国際クレジットカードとの紐づけが可能になった。顔写真の認証などもあり、かなり苦労したが、何とか成功した。大連に着いて早速、ホテル近くの道路沿いにある小さな商店で桃を買って試してみた。店に貼ってあるQRコードを私のスマホで読み取り、金額を手入力してお店の人に見せてから支払う方式である。旅行者向けの英語表示でもあり、当初、店のおばさんも本当に支払われたか半信半疑だったが、すぐ、どこかに電話をかけて応答に出た人に確かめると、ただしく支払われている、と納得したようだった。こうした人間的システムの存在が中国におけるオンライン決済の幅広い普及を支えているのではなからうか。

ここからは標題に即して少しお話したい。まず、新中国成立以来、河南省に縁のある人物として最も知られているのは焦裕禄(1922年生～1964年没)であろう。彼はとくに1962年12月に蘭考県の共産党委員会に赴任し書記を務め、1964年5月14日に長年患っていた肝臓病のため亡くなるまで、「三害」——風沙、塩碱、内涝(風と砂ぼこり、アルカリ、冠水)に苦しむ同県を貧困から救うため、正に命がけで奮

闘努力した。没後、毛沢東によりその功績が高く称揚され人民に奉仕する共産党幹部の模範として現在まで賞賛され続けている。焦裕禄についてはこの「雑感」でも第2回目(2020年5月号)で少し詳しく取り上げた。

今回の大連旅行で私は「大連博物館」(「大連現代博物館」)を見学したが、その一角に写真のような「足跡——焦裕禄在大連(1955~1956)」という数枚のパネルが立てられていた。焦裕禄は各地の共産党組織で働いた後、国の大規模工業建設の方針に従い、1953年7月に洛陽鉍山機器廠に赴任して蘭考県に異動するまで勤めている。その間の1955年3月から1956年12月にかけて大連起重機廠で研修を受けるため大連に滞在した。はじめは機械車間(工場)の見習い主任としてであったが、実習期間が終わった時には「最棒的車間主任」(最も優れた工場主任)として認められるようになっていた。この630日余りの大連滞在中の記録について2014年10月15日から1か月ほど「大連博物館」で特別展が開かれた(2014年10月14日付け『大連日報』)。今回私が見たパネルはその時のものを残していたのだと思う。

2番目は、2020年7月号の「雑感」で書いたように中国には「地縁的商会」あるいは「異地商会」と呼ばれる組織がある。これは一定の地域で活動する同郷出身の企業家が集まって、故郷および現在の居住地双方の経済に貢献する目的で設立する非営利団体である。言わば「同郷会」のビジネス版である。

大連でも河南省出身の企業家が2010年8月に「大連河南商会」を設立し、さまざまな活動を展開している(写真参照)。最近の話題としては大連河南商会が大連市の農村地域にある庄河市(県級市)の振興のために当地の工商団体と協定を結んでいる(『庄河統一戦線』2022年7月24日)。また、2021年7月の河南大豪雨(「雑感」2021年10月号と2022年3月号参



大連河南商会(2020年1月)



大連商場(2023年8月)

照)に際しては被災地に義援金を送るだけでなく、盧照堂会長自ら救援隊を率いて被災地に赴いた(『豫商播报』2022年12月8日)。

さて、大連観光で欠かせないのは「大連商場」とくにその食品売り場での買い物である。私も、毎回、お土産はそこで、と決めている。量り売りの食材、お菓子、高級海産物などあらゆる食品が揃っていて、見て巡るだけでも楽しい。今回、私は洋槐(アカシア)蜂蜜(550g、50元=約1,000円)と種無し山楂(さんざし)の干し物(500g、35元=約700円)を買った。喜ばしいことに「大連商場」は観光客や地元市民の支持を得て益々盛況のようである。

一方、私が河南省の開封市でお土産を買いに行くのは大型商業施設・開元広場(プラザ)内の「大商超市(スーパー)」である。この大商とは大連商場の略称のほずである。『百度百科』によると大連にある「大連商場」は正式名称を「大商集团有限公司・大連商場」と言い、1937年に建てられた大商集團の旗艦店である。さらに「大商超市」は「大商集團」傘下のスーパーマーケットチェーン、とある。開封の大商スーパーのほうは、私が知るかぎり、近年食品売り場が縮小傾向にあったので、今はどうなっているのか、少し気かりである。



大連博物館にて(2023年8月)

中国の面白い神話物語・伝奇物語 (25) – 「世説新語」

顧傑

皆様、お久しぶりです。

前回までは、「唐伝奇」を皆さんにご紹介してきました。「唐伝奇」の物語はまだ沢山あるのですが、手許の資料が限られているので、これから暫くは資料集めに専念したいと思います。しばらくお時間を頂いて、面白い話を集めて、又お話を続けたいと考えています。

楽しみにして下さる皆様には大変申し訳ございませんが、「唐伝奇」はしばらくお休みします。その代わりに、今回から『世説新語』について少しお話ししたいと思います。

「世説新語」は、非常に短い話を集めた小説集ですが、当時の世相や人物の評判など、歴史を理解する上で、貴重な資料を今に伝えていると言われ、珍重されています。

では、まずは『世説新語』とは何か、という処からお話を始めましょう。

＝：＝：＝：＝：＝：＝

『世説新語』とは、中国南北朝時代の南朝宋の臨川王・劉義慶が編纂した、後漢末から東晋までの著名人の逸話を集めた文言（古漢語）小説集である。漢代から東晋時代にかけての著名人の逸話や出来事を記録したもので、簡潔、鮮明、流麗、当時の生活習慣、精神性、言語文化を反映するだけでなく、まっすぐ、清潔、自由という「魏晋風」を伝えている。この晋朝の流れは明朝末期まで連綿と続き、現代に至ってもなお長い余韻を残している。

『世説新語』の編纂は、確かに劉氏一族が魏晋様式を好み、各界の人々が魏晋様式に憧れたことと関係があるが、劉義慶が魏晋の学者に惹かれ、多大な労力を費やしてこの本を世の中に著した理由は、その境遇が大いに関係していると考えられている。

劉義慶は宋の武帝・劉裕の甥で、「臨川王」の称号を与えられ、武帝から厚遇されていた。西暦 424 年、

宋の文帝である劉義龍が即位し、即位直後に徐羨之、傅良、謝晦ら自分を支持し擁立してくれた大臣たちを殺害した。文帝は嫉妬深く冷酷な人物であるが、これは、彼の兄にあたる劉義符が、皇帝に擁立されて間もなく、素行の悪さを理由に大臣たちにより、廃位させられ、殺されるという事態に直面したことが大きく影響していると思われる。文帝は周りの人間にも心を許さず、用心した結果、名将として名をはせた檀道濟を含む多くの功臣や藩士をも殺害して、自身の身の安全を図った。

このような背景から、劉義慶は中央政治の世界に嫌気がさし、災難を避けるために地方へと逃げた。文帝は劉義慶を説得し、安心させるために詔を出したが、彼はどうしても地方で仕事をしたいと言い、ついに荊州の市長に任命された。

地方に逃げ出した劉義慶は、怯えた鳥のようにならずと恐れていた。彼は宋の皇帝である劉義龍の支配下にあったが、劉義龍の、一族の王たちに対する疑心暗鬼と嫉妬の災難から遠ざかるために、文人を募って

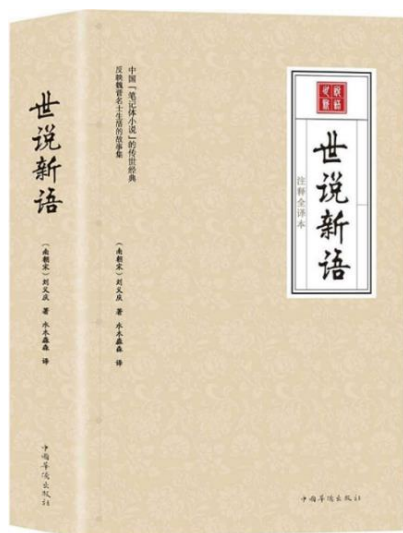
文化的なサロンを形成し、『世説新語』など多くの書物を編集させた。

『世説新語』の編纂は、西暦 439 年から 440 年頃と言われている。この 2 年間に注目すべきことが 2 件ある。一つは、元嘉 16 年、劉義慶が江州の首長であった時、多くの文人を勧誘したことである。

文学において当代随一と称された袁淑を中心に、呉の陸展、何長瑜、鮑照など書や詩文に優れた一流の文化人に交流の輪を広げたとされる。

『世説新語』が劉義慶とそのチームによりつくられたという説が正しいければ、編纂時期はこの頃である可能性が一番高いと思われる。

第二に、劉義慶は元嘉 17 年に転任したが、江州首



「世説新語」, 中国華僑出版社, 2019

長を引き継ぐためにやってきたのは、まさに朝廷の大臣を罷免され、追い出された弟の劉義康である。兄弟は江州で会った時、文帝・劉義龍からの圧迫に悲しみを感じ、自分たちの置かれた状況の危うさを憂慮したに違いない。その結果、魏晋の文人たちの精神性に解脱と超越の安らぎを求めたことが、『世説新語』を編纂したと密接な関係があると思われる。

『世説新語』には様々なテキストが存在するが、現存する最古のものは、宋の紹興8年に董弅が刻んだ3巻本 (<https://www.amazon.co.jp/世説新語会評-宋紹興八年-1138-簡体字横組/dp/7807291109>) で、36編1130話が収められている。

その第一巻は、儒学院の四学問である「徳」「言」「政」「文」の四編である。これは孔子の四科であり、本書の思想的傾向が儒教的側面を持っていることを示している。

しかし、本書全体は仏陀の教義内容に関する形而上学的な議論が多く、その思想的方向性はそれほど単純ではないと言われている。

魏・晋・南北朝時代の幻想的な「筆記小説」の代表作である『世説新語』は、メモを取っている形式の話や逸話の短編集である。魏晋学者は、『世説新語』や関連資料から、魏晋時代には幻想的な物語を語ることが流行し、人々の考え方や生活環境、社会全体の雰囲気まで、大きな影響を与えたことが分かる指摘する。

『世説新語』は漢、魏から東晋にかけての逸話を集めた書物で、魏晋様式を研究するための優れた史料でもある。魏晋時代の著名な学者たちの生活、真実の追求や趣味の楽しみ方などが生き生きと描かれてお

り、この書物から魏晋時代の学者たちの群像が得られ、これらの群像を通して当時の上流社会の風俗を知ることができる。

『世説新語』は、文字数こそ多くない資料だが、内容は非常に豊かで、この時代の学者階級の生活様式、精神性、その話芸や豪放かつ自由な文化を広く反映している。逸話などの文体は、筆記小説の先駆けであり、後世の小説の発展に遠大な影響を与えた。本書のスタイルを模倣して無数の作品が書かれ、古代小説の独特な形式となって来た。本書に収められた物語の多くは、後の歌劇や小説の素材となったり、詩文で引用されたり、中国文学史上重要な位置を占めている。有名な文学家魯迅も、本書を「名士の教科書」と呼んでいる。

「世説新語」は有名人の逸話を多く記載しているが、その内容が果たして事実かどうかについて、文学界では、今でも議論が続けられている。

皆様は「七歩の詩」のことをご存知だろうか。

三国時代、曹操の死後、魏の建国に当たり、皇帝の座をめぐる争いの渦に巻き込まれた曹操の息子曹植は、魏の皇帝となった兄・曹丕に詩の才能を妬まれ、影響力を怖れられ、「七歩歩くうちに詩を作れなければ死刑にする」と言われ、身を護るためにすぐに詩を作り上げたという逸話があり、この話も「世説新語」で紹介されたものである。

作家の余秋雨は、曹丕は高い知性の持ち主であり、彼が宮中でこのような非道で幼稚ないたづらをするとは考えにくいと考えている。また、曹丕は曹植が頭の回転が速いことを知っているはずだから、曹植を困らせようと思えば、こんな愚かなことはしないだろう…とも言われている。

余秋雨は、この詩は適切な比喻と音楽的な味わいがあり、本当に曹植の手によるものだろうと考えているが、詠まれたという劇的な場面は、おそらく「世説新語」の作り話ではないかと考える。

更に加えて言えば、この「七歩の詩」は、曹植の詩文集である「曹氏建集」に収められていないので、偽作ではないかと言う説も言われている。

当時の魏国の状況や、この話が「世説新語」ではどのように語られているかなどについては、また後日皆さんにご紹介しようと考えている。



董弅が刻んだ世説新語, (尊経閣叢刊 世説叙録:尊経閣叢刊(中), 1929年, 立国会図書館デジタルコレクションから)

「瑠璃」というのは色彩を表す言葉とばかり思っていたので、「琉璃牌坊」という名称から、てっきり瑠璃色(青紫色)をした建造物かと思った。しかし、実物を見たら、いとも極彩色の、装飾に富んだ門で「瑠璃色」のイメージとは掛け離れていた。

この記事を書きながら、「瑠璃」について調べてみた。「瑠璃」は「青紫色(又は浅黄色)」を表す以外に、仏教の「七宝」の一つとしての金緑石またはラピスラズリやコバルトガラス、或いはそうした色の小鳥や蝶の古称であったという。ただし、ペルシャから中国や日本に伝来した「白瑠璃碗」の存在が示すように、「瑠璃色」の意味に限らず「ガラス」を意味しても使われて来たようである。

建築との関連で「瑠璃瓦」について見たら、「釉薬瓦とは表面を釉薬で化粧した粘土瓦のことで、一中略一古くは“瑠璃瓦”と呼ばれていた」(ウィキペディア)とあり、簡体字の“琉璃瓦”の訳語とされた日本語が「釉薬瓦」であったことが分かった。

「琉璃牌坊」とは瑠璃色の牌坊ではなく、建築材料に陶器瓦を使用した牌坊なのだと合点した。

また、「画像検索」すると、此処の「琉璃牌坊」と瓜二つのものが、北京市内などに存在するようである。例えば、「国子監」内の牌坊や朝陽門外の東岳廟の牌坊などである。牌坊はその施設の格の高さを表すために付設されているように感じた。

■「大紅台」に近づく

かつては、僧侶と限られた王侯貴族しか通行を許されなかった「琉璃牌坊」を潜って進んだ。

まばらな樹木の間をゆったり縫うように続く道は勾配も穏やかで歩き易いが、時刻は9時を回って太陽も頭上に昇り、かなり暑くなってきた。日傘をさしている女性客も見受けられた。10分ほど歩いたところに“大紅台入口”と「左向きの矢印」が書かれた、赤レンガ

色の四角柱の案内標識が建っていた。この場所が下りて来る復路と合流する地点らしかった。ここまで登って来た道の傍らに建っていたはずの「中罡殿」や「西五塔白台」はそれと意識しないうちに通り過ぎてしまったようだ。

そこから5分ほど歩いたら大紅台の真下に出た。白台の建物の上に赤レンガ色の高層の大紅台を載せた建物を見上げると、かなりの高さでスケールで威圧感がある。

大紅台は左右対称の外観をしており、中央に仏壇が縦に重なって作られ、それぞれに仏像が安置されているようだった。その両側には、たくさんの小窓があるが、白く塞がれているものと、開放されているものが、左右対称に揃えられていた。土台となった白台の建物の小窓は赤レンガ色で覆われており、それらのコントラストは心憎いほど鮮やかである。

屋上の外壁にも仏壇が横に並んでいた。中央から左右それぞれに17基が数えられた。屋上には更に2つの楼の屋根が見え、東西に配置されているようであった。

大紅台の建物の外で、辺りを見下ろしている人々が見え、たくさんの布で飾った幟(のぼり)のようなものも見たので、そこは広場になっていることが分かった。



下から見上げた大紅台の偉容



対岸の城壁、見下ろした「五搭門」と「琉璃牌坊」

■「大紅台」から彼方を眺める

大紅台への最後の階段を登りながら、登って来た方角を振り返った。武烈河に沿って走る「环城北路」の白いガードレールと背の高い街路灯が見える。対岸には小高い山が連なるが、尾根上には避暑山荘を取り巻く城壁の一部が見えている。

見下ろすと、「碑亭」の茶色の屋根が遠くに見え、「五搭門」の特徴的な姿が目についたが、屋上の五つの塔は後ろから見ると、殆ど違いが分からない。そこから先へ進んで通り抜けて来た「琉璃牌坊」は黄色と青色の琉璃瓦が鮮やかである。

■大紅台前の広場

階段を登り切ると、広場になっていて、赤レンガ色の巨大な建物が目の前にあった。幟に見えたのは、大きな石造りの土台の上に、頑丈なポールが建てられ、その先端から垂らされたロープに、色



広場にあった4本の「タルチヨ」のポール

とりどりの布(旗)が結わえられていた。チベットを取材したTV番組で、寺院の屋根や小高い丘の上の石積みからロープを張り、鮮やかな5色の旗を風になびか

せている場面を見たことがあった(この“祈祷の旗”は“タルチヨ”と言い、旗の色にも意味があり、青、白、赤、緑、黄と順番も決まっているという)。この旗は“くすんだ色”で、模様があつたり、5色以外の色もあるように見えた。それぞれの旗の裏にはチベット土着の宗教であった「ボン教」の呪文が書いてあるという。広場の真ん中を挟んで2本ずつ、合わせて4本のタルチヨのポールが建っていた。

大紅台の壁面近くには、「摩尼車」が置かれていた。チベット仏教に限らず(日本でも真言宗、天台宗、浄土宗などの大本山に見られる)、円筒を右周りに(手を右から左に動かす)回転させることにより、円筒内に収められた経文を、回転させた数だけ唱えたと同じ功德があるとされる。此処では6個の摩尼車が一つの屋根の下に吊るされており、それが4



広場に置かれた「摩尼車」

つ、広場に対称的に設置されていた。実際に摩尼車を回している観光客も見られた。

■大紅台の屋上で

階段を一気に登って大紅台の屋上に出た。屋上は四角い回廊になっていて、その中央部分に「万法归一殿」の金色の屋根だけが顔を出していた。つまり、「万法归一殿」は大紅台の上には建っているのではなく、大紅台の建物の内側に保護されるような形で建っていて、屋上には最上部を覗かせているだけなのである。

回廊から下を覗き込むと、大紅台の建物は吹き抜けのようになっていて、どの階においても、「万法归一殿」に向かって壁がない構造になっていた。

金色に彩られた建物は荘厳さを漂わせ、その細工は精緻を極めていたようであった。そして、その屋根上には、あの「並んで歩く何者か」を見ることが出来たのであった。(つづく)

新渡戸稲造と台湾(3)

和田 宏

<プライベートなエピソードの出処>

新渡戸稲造が多方面で活躍した様子や私的な出来事を、ここまで“その場で見て来たように”紹介してきたが、これには、実はタネがあった。

私には稲造の孫に当たる加藤武子さん(1920～2017)と友人だった時期があり、世田谷区尾山台の自宅へ遊びに行き、彼女が周囲から聞かされた逸話や自らが体験して感じた事柄を、祖父・稲造のエピソードとしてお聴きすることが出来たのである。家族しか知り得ないはずの、昭和天皇へのご進講から帰宅して着いた食卓で、稲造が天皇について語った時、彼女は13歳だったはずである。

稲造の人となりを示すプライベートなエピソードも、彼女からの聞き書きに拠っている。

<冗談好きで、ユーモアがあった稲造>

稲造は真面目一本の人ではなく、一高時代から冗談好きで、友達が集まれば冗談を言い始め、やがて、冗談の応酬になり、部屋中、笑いに包まれたという。

札幌農学校教授をしていた頃、女学生達が稲造を慕ってやって来るようになったが、“庭にサクランボが植わっていから好きなだけ取っても良いよ”と伝えておいたので、女学生達が来て、サクランボをたくさん籠に入れて帰ろうとした。突然、稲造が現れて、“いたずらっかが、僕のお庭からサクランボを盗っていくぞー!”と叫んだので、女学生達は、びっくりして逃げ帰り、“取りに來いと言ったから行ったのに酷いわー”と憤慨した。その後、稲造独特のユーモアだと判って、皆で仲良くサクランボを食べたという。

ただし、稲造は日記を書く時は、日記の「紙」を「神様」だと思って、すべてを正直に書いた。英文で書かれた日記だけは、“絶対に内容を公表しないように”と家族に釘を刺したため、現在も未公開である。

<実用書に対する稲造の思い>

稲造は、一高校長や東京帝国大学教授を務める傍ら、「実業之日本社」の編集顧問になり、大衆雑誌、婦人雑誌などに寄稿し、高校や大学に行けない勤労

青年や婦女子に向けて、『修養』とか『世渡りの道』、『自警』、『婦人に勧めて』、『一人の女』など、多くの実用的、啓蒙的な本を書いた。

小野塚喜平次総長から“そんな大衆誌に文を載せるなんて。君、書くのを止め給え”と忠告された時も、稲造は、“他人が何といても構わない。皆のために書くんだ”とはね返した。

稲造は、“長い間の鎖国の影響で日本人は封建的な考えが抜け切らないので、それを打破し、もっと広い心になってもらえるように、そのためのヒントや道徳感を織り込むように執筆しているんだよ”と、常に言っていた。娘や女中さんに、“こういう風に書いたけど、分かるかね?”と読んで聞かせ、娘が“そこをもう少し一般の方にわかるような言葉にしたら”とか、女中さんが“その言葉の意味が分かりません”と言ったりすると、“なるほど、そうか”と頷き、書き直す場面もあったという。

孫の武子さんは、自宅近くの床屋のお爺さんが、“私は新渡戸先生の『修養』のご本を小僧時代に読んで、非常に助けられました”と話していたことを覚えていた。

<ジャンヌ・ダルクを崇敬>

稲造は神秘主義的な性格があり、札幌農学校の生徒の頃から“オルレアンの乙女(ジャンヌ・ダルク)”を崇敬しており、38歳でフランスに渡った機会を利用して、ジャンヌの生地ドンレミ村を訪れた。道に迷っていたら一匹の猫が体を擦り付け、先に立って歩き出したので、後について行くと、ジャンヌが神の召命の声を聴いたという泉に出た。泉のほとりに腰をかけて、1425年にジャンヌが眩しい光と共に聴いた“ジャンヌよ、シャルル王太子のところに行きなさい。そしてフランスを救うために戦いなさい”という神のお告げについて暫し瞑想した。

それから21年後、国際連盟事務局次長になっていた59歳の時、再びジャンヌの足跡を辿って、フランス内のゆかりの地を尋ねる巡礼旅行をした。どこへ

行っても、ジャンヌに関する本や記念品、像を買い求めて、それらを自宅の書斎に飾っていた。

稲造は、いつかはジャンヌに関する本を小説風に書こうと構想を練っていたようであるが、実現しなかった。実は、私もジャンヌ・ダルクの像を本棚に飾っている（笑）。

<『武士道』に背中を押された李登輝>

日本の統治下にあった台湾で、1923年に生まれたのが、中華民国第4代総統になった李登輝だった。京都帝国大学農学部に進学し、学徒動員され、終戦時は大日本帝国の陸軍少尉だった。彼の日本名は『岩里政男（いわさとまさお）』だったが、“私は1945年8月15日までの22年間は、自分は日本人だと思っていた”と語っている。若い頃、読んだ『武士道』が、自らの多難な人生を歩む上で背中を押してくれたとしている。稲造が台湾に残した功績の一つだったと言えよう。李登輝は、2003年に「『武士道』解題～ノーブレス・オブリージュとは」という本を、格調高い日本語で著している。

<“唐人お吉”を偲んで>

稲造は、カナダ、アメリカへの旅行に出掛ける直前の1933年7月16～17日、多忙の中、わざわざ下田を訪ね「唐人お吉（斎藤きち）」の墓や「お吉が淵」をお参りし、今も残っているお地蔵さんを建立した。

日米和親条約の締結後の1856年、下田の玉泉寺に着任したアメリカの総領事タウンゼント・ハリスの身の回りの世話をした“唐人お吉”を、稲造は、犠牲的精神で日米間の融和に尽くし、国策に翻弄された悲劇の女性であり、感謝すべきだと考えていた。

虚弱体質だったハリスは、看護婦を派遣して欲しいと頼んだのだ。ハリスは、聖公会の謹厳なクリスチャンであり、生涯独身を貫き、童貞だったと言われている。しかし、幕府は妾婦を要求していると誤解して、大金を渡し、お吉を説得したのだった。

当時16歳だったお吉は、ハリスが“牛乳を飲みたい”と言うので、日本人がタブー視していた牛乳を、農家に大金を払って手に入れ、ハリスに飲ませるなど懸命に尽くしたが、数ヶ月で帰された。当時の日本人は、外人と関係を持った女性は汚れていると言って忌み嫌った。その為、彼女は誰からも相手にされず、芸妓や酌婦、髪結い、小料理屋店主などをして糊

口を凌いだが、自暴自棄になった挙句、酒に溺れ、1890年3月27日、下田街道沿いの稲生沢川に身を投げた。誤って落ちたという事故説もある。享年48。

稲造は、「♪から草の浮き名のもとに枯れ果てし君が心は大和撫子♪」と言う短歌も作った。お吉の運命と彼自身の運命を重ねていたのかも知れない。

<巨星墜つ！>

1933年8月14日から、カナダのバンフで開催された第5回「太平洋問題調査会」に日本側理事長として出席。新渡戸は70歳になっており、病弱の身体を



病院敷地内にある「終焉の地」碑
(ウキペディアより)

押し8月2日横浜港からカナダに向かった。2週間に亘る会議が終わっての帰途、ヴィクトリア市で出血性膀胱炎によって体調を崩し、入院先のロイヤル・ジュビリー病院で昇天した。1933年10月15日（日本時間16日）、享年71。病院敷地内に「終焉の地」の碑がある。

今は夫人・メアリーと息子・遠益と共に、府中市にある都立多磨霊園に眠っている。私は、NHK国際放送局英語ニュースで働いていた時、同僚のカナダ人の女性アナウンサーに、“私が生まれたのは、ロイヤル・ジュビリー病院なのよ”と言われて、びっくりしたことがある。

<太平洋の架け橋>

稲造は1883年9月、東京大学の入学面接試験で、“君は何のために勉強するのかね？”と外山正一・文学部長から問われた時、“願わくば、我、太平洋の架け橋にならん！”と答えた。“それはどういう意味かね？”と重ねて訊かれた稲造は、“西洋の長所を日本に輸入するだけでなく、日本の長所を西洋に伝える橋になりたいという事です”と述べたというエピソードが伝わっている。

正にこの言葉通り、国際親善に尽くす平和の使徒としての人生を歩んだ。稲造が架けようとした相互理解の橋は、人種、民族、国家を超え、過去、現在、未来に必要なものではないだろうか。（完）

香山の紅葉

訳：一瀬靖子／大槻一枝

昔昔、香山の麓に父と娘が住んでいた。父親は年の頃六十過ぎ、名は禹晴^{ユイチン}、娘は串紅^{ツアンホン}という。二人は仲の良い親子であった。禹晴老人は毎日山に登って、薬草、キノコなどを採り、娘は家で糸を紡ぎ、布を織っていた。串紅はとても器用な娘で、彼女が織り上げた布には、生き生きとした野の花が織り込まれていた。ある日、娘は父親に、

「父さん、香山の頂には五色の雲がかかるのでしょ。私も見て、それを布に織り込んでみたいわ」

とねだった。父親は

「よかろう。だが、勝手に飛び回るんじゃないぞ」

と、言い聞かせた。

翌日、禹晴は娘を連れて山に登った。道々、串紅は放たれた小鹿のように、草を摘んだり、花を愛でたり、嬉しさに無我夢中だった。禹晴老人は賢く元気な娘を心から愛おしんでいた。彼らが香山の中腹まで来た時、娘は喉が渴いたと言った。父親は、

「少し我慢しなさい。頂上に着いたら山陰に行って“苦露児(のびる)”を掘ってあげよう」

と言った。娘は父の後ろを追って道を急いだ。

香山は草深く、木々が密生していて、道は陰しく人家も少ない。ここには古くから青大将(蛇)が棲んでおり、あぜ道にとぐろを巻いて、風を飲み、露を吸い、さらに千年の古靈芝(ひじりだけ)を取って食べ、人に化けたり、悪さのし放題だった。

この日も、大蛇は岩の上にとぐろを巻いて鱗を干していた。そこへ仙女のような娘が現れた。無邪気に駆けまわり花を摘んでいる姿を見ると、大蛇はたちまち恋慕の情を掻き立てられた。しかし彼女の傍には山菜や薬草採りの経験豊富な父親が、油断なく彼女を見守っている。大蛇は以前危うく老人に捕まりそうになったことを思い出した。幸いにも気づくのが早く、尾を一寸ほど斬られただけで済んだのだが

…。今度は人間に化けて見ようか？でも老人に見破られるかもしれない…。どうしようかと迷っていると、突然娘が喉が渴いたと言い出した。大蛇はここぞとばかり頭の上から数個の赤い球をつかみ取って空中に投げた。すると赤い珠は紅い杏^{あんず}の実となった。赤い実は見るからにみずみずしい。

香山の杏の樹は、春には陽を浴びて雪のように白い花をつけ、“西山晴雪”と称えられ、夏になると枝いっぱい実をつけて、芳香を十里四方まで漂わせる。しかしこの時節外れにどうしてまた赤い実をつけたのだろうか？しかし串紅はこれを見ると大喜びではしゃいだ。

「父さん！ 来て！ 真っ赤な杏がなっているよ！」

禹晴老人はこれを見て、何かおかしいと感じた。臭いをかいでみたが、それは紛れもなく杏の実だ。娘は喉が渴いたと言うので、実をもぎ取って、

「おあがり！ 食べれば乾きが止まるよ」

娘は赤い杏を受け取った。

「気をつけなさい。下には大蛇がいるかもしれないよ。山蜂などの巣もある。ここに来てお掛け」

父と娘は岩に座り、禹晴は火打石で煙草に火をつけた。娘が杏を一口かじり、父親が煙草の煙を一服くゆらせると、突然、枝の杏が落ち始め、蛇の卵に変わった。娘はひどく驚き、叫び声を上げた。

「父さん、見て！ 杏が蛇の卵に変わったわ！」

禹晴もこれを見て顔色を変えた。

「これはいけない！ 逃げよう！」

しかしこの時、串紅の顔は真っ赤、唇も紅をぬったように真っ赤になっていた。禹晴は、

「しまった！ お前は蛇の毒に中ったのだ！」

老人は慌てて摘んできた薬草の中から甜甘草や解毒薬を選び出し、

「早く、口の中で咬みなさい」

と言いながら娘の手を引いて走りだした。しかし

遠くまで行かないうちに娘が倒れた。禹晴老人は慌てて大声で娘の名を叫んだ。

「串紅！目を覚ますのだ！私の大切な娘よ！」

しかし串紅は固く目を閉じたまま、顔色は次第に紫に変わって行く。禹晴老人は娘を平らな岩の上に寝かせ、煙草入れから煙草を取り出して、串紅の周りに虫が近寄らぬように、煙草の葉を播き散らし、急ぎ泉水と解毒薬を求めて下山した。

大蛇は隠れていた石の後から出て来てみると、娘が道端の岩に横たわっている。してやったりと大喜びで娘にとびかかろうとしたが、煙草の香りにむせて、娘に近づくことができない。彼は思い立って“九天玄女娘娘”(娘娘＝女神のこと)に成りすまして様子をうかがうことにした。

一方、串紅の父親は解毒薬を探しまわった。すると目の前に小さい廟が現れた。おや、こんなところに廟がと近づいて見るとそれは玄女廟だった。“溺れる者は藁をもつかむ”という。彼は急ぎ廟に駆け込み、跪いて祈った。

「九天玄女様、私禹晴はどの神様のお怒りを買ったのでしょうか。娘が今大変な目にあっています。貴女様のお慈悲により、娘の命をお救いくださいますようお願いいたします。私は毎年あなたにお焼香し、月月お供えを欠かさずお参りいたします」

大蛇は老人の祈りを聞きにんまりした。ところが煙草の臭いが漂ってきて、大蛇は我慢しきれず化けた女神の口から大蛇の舌を出してしまった。禹晴老人はこれを見て驚き、立ち上がるが早いか逃げ出した。化けの皮がはがれて、大蛇の“廟”は山の洞と化した。老人が洞穴を出た時、足を踏み外して崖から落ち、哀れにも六十余歳の命を落としてしまった。

黒雲の立ち込める空に一筋の電光が走った。山の頂に九条の瑞雲がたなびき、彩りも華やかに、大勢の仙女が一人の女神を囲んでゆっくりと下降し、串紅が横たわる岩に近づいた。仙女らが仙露酒を串紅の顔にふりかけると、串紅は目を覚まして身を起こした。多くの仙女に囲まれて夢かと思った。母親のような女神に顔の汗を優しくぬぐわれて、彼女は突然父親を思い起こし、周辺の谷に向かっ

て叫んだ。

「父さんー〜」

谷底からは、

「父さんー〜！」

空しくこだまが帰って来るだけだった。

この時、二人の仙女が剣で大蛇を取り押さえて来た。そして女神に、

「申し上げます。この者が大胆にも女神さまに化けて、禹晴老人を殺害しました。どうぞご処分を！」

女神が指を一本動かすと、激しい雷鳴が起こり、大蛇は瞬間に切り裂かれ、断末魔の声と共に東に倒れ低い小山と化し、現在の“青竜山”になった。倒れた大蛇の頭を、人々は“紅山口”と呼び、そこにかかった橋を“青竜橋”と呼ぶようになった。

串紅は少しずつ意識を取り戻したが、悲しいことに父親に会えない。彼女は泣き崩れて父親を呼んだが、いつになっても返事は帰って来ない。泣き叫びながら山を越え、川を渡って父を求め、声は枯れ涙も乾ききってしまった。化けて実った赤い実は山の坂道に落ちて、“欧梨(野生の灌木、実は砂糖漬けになり、種は薬用に使われる)”になった。彼女はついに谷間の洞窟で父親を見つけ、思いきり泣いた後、父親に寄り添ったまま若い命は果てた。彼女の死は天地を動かし、九天玄女神は彼等二人の魂を天宮に呼び入れた。

串紅が泣きながら通った道に無数の櫨はびの樹が生え、秋になると山は紅葉に輝いた。杏の樹は大蛇にその名声を汚されて、徐々に姿を消し、代わって櫨の樹が育って行った。人々は、真っ赤な紅葉は串紅の血で染まったものだと言い、彼女の口には解毒の薬草が含まれていたの、今に至るまで櫨の紅葉には薬草の香りがするという。

秋、人々は真っ赤に染まった櫨の木に降りた霜を集めてお茶を淹れる。こうして淹れたお茶は吐血、咳に効くとのこと。天高く空澄み渡る秋になると、人々は香山を覆う櫨の木の紅葉を見て、花を摘みに来た美しい串紅娘に出遭ったように思うのだった。

(張嘉鼎 収集・整理)

みんなの広場

■料理講習会のご案内

わんりいでは、長らくお休みしていた料理講習会を再開します。わんりい中国語勉強会でご指導くださる、上海出身の郁唯先生に、中華粽と棗の粽を教えてください。詳細は下記のとおりです。

記

●「中華粽の講習会」

日時：10月12日（木）10：30～15：00

場所：麻生市民館 料理室

新百合ヶ丘駅 徒歩2分

講師：郁唯先生（上海出身）

会費：1500～1700円（開催までに決定）

お持ち帰り用「粽」付

以上

~~~~~

昼食は、完成した粽と、わんりいが用意するスープ、点心でお食事会にしましょう。終了は遅くとも15：00を予定しています。

皆さまのご参加をお待ちします。

＝：＝：＝：＝：＝：＝

### ■第25回町田発国際ボランティア祭「夢広場」のご案内

国際ボランティア祭「夢広場」が今年は25回目を迎えます。節目の年であることから実行委員会で検討の結果、毎年11月3日一日で同時に行われていた、「物販」と「歌や踊りのイベント」を切り離して行うことにしました。

「物販」は、従来通り11月3日にぼっぼ町田広場で行うこととし、「歌や踊りのイベント」は11月23日（木・祝）に町田市民フォーラム3階ホールで行うこととなりました。

11月3日の開催時間は10時から15時で、午前中は開会に当たってのセレモニーを行います。「物販」について、わんりいはこれまでラオスの少数民族・モン族の手づくり小物を販売してきましたが、コロナが長引く中、ここ数年入荷がなく今年は参加を見送ることとなりました。

11月23日（祝）のイベントには、わんりいの会友である歌手・エメさんがボイストレーニングを基調とした歌で出演されます。どのような内容になるかは当日のお楽しみです。

なお、12月2日には、これまた恒例の「まちカフェ」が町田市役所全館を利用して開催されますが、わんりいはワークショップ・水墨画教室を開催する予定です。詳細は10月号に改めて、ご案内を掲載します。

＝：＝：＝：＝：＝：＝

### ■第31回国際・オルガン・フェスティバル・イン・ジャパン 2023

パイプ・オルガン演奏：  
リスト音楽院教授  
ヤーノシュ・パールウル（ハンガリー）



①10月16日（月）

19：00開演（18：30開場）

会場：東京カテドラル聖マリア大聖堂

入場料：6000円（全席自由・税込）

②10月18日（水）

18：30開演（18：00開場）

会場：神奈川県民ホール（小ホール）

入場料：5000円（全席自由・税込）

◇演目（両日共通）

ヨハン・セバスティアン・バッハ

『前奏曲とフーガ ハ長調 BWV547』

『小さな和声の迷宮 BWV591』

『クリスマスキャロルのカノン風変奏曲』

ほか

§わんりい会員には割引があります。

申し込み先：山田賀世 電話：044-981-6171



## ■満柏画伯の講演会と作品展示会

◎「四字成語」の挿絵、「みんなの広場」の俳句  
でおなじみの満柏画伯の講演会と作品展示会のご  
案内です。

### 無料講座：「道德経と中国芸術」

講師：満 柏（アーティスト・美学研究者）

日時：10月5日（木）14：00～

場所：中国文化センター

港区虎ノ門3-5-1 37 森ビル1F

日比谷線「虎ノ門ヒルズ」駅 A2 番出口徒歩2分

銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩7分

定員：40名（要予約）

電話：080-5017-9518

Mail:ncs.cuulture@gmail.com

### 第19回日中水墨協会展

#### 国際芸術家展 YOKOHAMA 2023

主催：日中水墨協会・国際芸術展実行委員会

会期：10月10日（火）～10月15日（日）

時間：10：00～18：00 入場無料

初日＝13：00より 最終日＝15：00まで

会場：神奈川県民ホールギャラリー

横浜市中区山下町3-1

アクセス：

みなとみらい線日本橋大通り駅3番出口徒歩5分

元町中華街駅徒歩4分

JR 根岸線・市営地下鉄関内駅徒歩15分



## ■中国語公開講座

① 発音総復習・母音編

9月17日（日）1：30～4：30

② 陳淑梅先生講演

「楽しい番組作りのよもやま話」

9月30日（土）2：30～4：30

③ 発音総復習・子音編

10月1日（日）1：30～4：30

主催：練馬中文教室

申込：090-3509-2021（要予約）

会場：①、③は、練馬区役所19階

②は、同上20階

講師：①、③鈴木繁（元日中学院副学院長）

会費：①、③ 各回 500円、

②1000円（わんりい会員500円）

※学生は、①②③共 各回 100円

\*練馬区役所：練馬区豊玉北6-12-1

アクセス：西武池袋線練馬駅西口徒歩5分

都営大江戸線練馬駅A2出口6分

### ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

行水の

捨てどころなし

虫の声

上島鬼貫

yù pō wū shuǐxíngyòu zhǐ  
欲泼污水行又止

qiū chóng chù chù yǒu míng shēng  
秋虫处处有鸣声

【わんりいの催し】  
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時： 9月19日（火）10：00～11：30  
10月10日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

*** 中国語で読む 漢詩の会 ***

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時： 9月17日（日）10：00～11：30
10月29日（日）10：00～11：30
- 講師：植田渥雄先生
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jppj@yahoo.co.jp
(有為楠)



■9月・10月定例会 代表宅

▼ 9月7日（木）13：45～

▼10月8日（日）13：45～

■‘わんりい’ 発送 三輪センター

▼10月号 10月2日（月）

☆☆編集後記☆☆

皆さま、夏休みは如何お過ごしでしたか？ 今年の8月は、何時になく暑い日が続きました。それでも9月の声を聞くと、朝夕ふとした時に涼風を感じ、そこはかたなく秋の訪れを感じホッとします。しかし日中の暑さは厳しく、残暑は、毎年着実に厳しくなっています。来年の夏は、どんな暑さを引き連れてやってくるのでしょうか。

変わったと言えば、台風も今は様変わりしました。昔は夏の「雨台風」、秋の「風台風」と言われて、秋の台風の強風が、折角実った稲を倒してしまい、収穫量が減少するのを警戒して、「二百十日」と言う言葉もできているのに、近年は夏の台風も強風を伴い、電信柱や屋根さえ吹き飛ばします。

最近の気象現象は、人間社会に警鐘を鳴らすように、桁外れの威力を見せつけて来ます。自然からの警鐘を、私たちはどう活かせばいいのでしょうか。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年度会費1000円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 286号の主な目次

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 寺子屋 四字成語(65)『过目成诵』……………    | 2  |
| 「漢詩の会報告」(67) 白居易『微子を夢む』…   | 3  |
| 「中原雑感」(34)「河南省 in 大連」…………… | 6  |
| 中国の神話・伝奇物語(25)「世説新語」……………  | 8  |
| 「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(5)……………    | 10 |
| 「新渡戸稲造と台湾」(3)……………         | 12 |
| 「香山の紅葉」……………               | 14 |
| みんなの広場……………                | 16 |
| ‘わんりい’の催し・お知らせ……………        | 18 |